

# 「現代文とは何か」 から始めましょう

代々木ゼミナール教材研究センター 本部長

土生 昌彦

「現代文とは何か」— 毎年、初回の授業でそれについて話をするにしている。考えてみると、他の科目ではこういうことは少ないのではないだろうか。「英語とは何か」、「数学とは何か」という話が、初回の授業のメイン・テーマになるということはちょっと想像しにくい。現代文とは何か — それは初回の授業で「現代文とは何か」という説明を要する科目である。そんなことも言えそうな気がしてくる。

# 1. 「現代文」とは何か

---

---

さて、現代文とは何だろうか。生徒にそう問いかけてみる。

「現代に書かれた文章を読む科目なんじゃないですか」

「なるほど。でも『読む』だけでいいのかな」

「えーと、そうだな、書くこともあるから『現代に書かれた文章を読んだり、書いたりする科目』」

「いま『現代に』っていったけど、いったいつから現代なんだろう」

生徒たちは考えこむ。

「今日はもちろん現代、きのうも現代。おとといも現代だ。そういうふうにさかのぼっていくと、いったいつから現代なんだろう」

「戦後？」

「第二次世界大戦の後ってこと？すると 1945 年以降でいいのかな。」

「いやもっと前かもしれない」

「そうだね。夏目漱石や森鷗外って戦後の人じゃないけど、現代文にはよく出てくるからね」

「じゃあ、明治以降。」

「そう、少なくとも『現代文』という科目に関する限り、現代とは明治維新以降、具体的にいうと、1868 年以降と考えたほうがいい。たとえば大学入試センター試験では現代文の出題範囲を「近代以降の文章」と呼んでいる。これもおおざっぱにいうと、明治以降ということだ。『現代』ということばは、日常的には『今』という意味で使われるけれども、現代文の『現代』は実に 140 年以上の時間幅をもっていることになるわけだ。だから、『現代の文章だから、なんとなく感覚で読めるはず』という現代文の「常識」はかなりあやしいということになる」

こうして、まず「現代」の定義を行う。次に「文」を定義して、はい、終わり、ということになるかという、そうはいかない。そんなおざなりな話で済ますのならば、わざわざ貴重な初回の授業を使って、このテーマを取り上げる意味がない。「定義」の話はまだまだ続くのである。

「さて、さっき君たちがやってくれた定義を一応まとめておこう。現代文とは、『現代日本語で書かれた文章を読み、書く力を養う科目』。そんな感じかな」

彼らは軽くうなづく。

「さて、それでは、この定義のなかのことばを一つだけ、さらに定義してほしいんだけど、いいかな」

生徒はやや不思議そうな顔をしている。さらに定義する必要のあるようなことばが、はたしてこの中にあるのだろうか。そういう顔だ。

私はおもむろに生徒の顔を見渡す。

「読むって、どういうことだろう」

生徒はきょとんとしている。読む？読むって、あの「読む」のこと？「読む」は「読む」に決まっているじゃないか。いまさら説明する必要なんてない。彼らの顔にはそう書いてある。

「なぜ、そんなあたりまえのことを聞くんだって顔してるけど、定義というのは、ふだんあたりまえと考えられていて、実はそのために見過ごされている大事な問題に気づくためにやるものなんだ。『読む』という行為がどういうものなのか、『あたりまえ』で片づけずに、自分のことばであらためて説明してくれないかな」

最前列に座っている生真面目そうな生徒が答える。

「読むって、要するに文字をたどって行って、その文章の意味を理解するってことじゃないですか」

さすが最前列に座っているだけあって、ことばに淀みがない。

「なるほど、読むとは文字をたどって文章の意味を理解することである。『読む』の定義はこれでいいかな」

多くの生徒が軽くうなずく。

「ほんとに。それでいいの。」

私はたずねる。

「じゃあ、ちょっと質問を変えるけど、そもそも君たちは日本語を読めるんだろうか、読めないんだろうか」

「うーんと、あんまりむずかしい文章じゃなければ、とりあえずは読める」

そう彼らは答える。

「少なくとも外国語よりはぜんぜん読めるわけだよね。むずかしくてところどころわからないことはあるだろうけど、最初から最後までぜんぜんわからないということはないはずだ。だからおおむね読めると考えていいと思う。でもそうだとしたら、現代文という科目で君たちはいったい何を教わるんだろう。ほとんど自分で読めるんだったら、あらためて人に教わる必要なんてないんじゃないの」

何人かの生徒が「そうかもしれない」という顔をする。

## 2. 「読む」とは何か

---

---

現代文という科目は何を学ぶべきかということがかなり曖昧な科目である。そこから「満点も取れないが、0点も取らない科目」、「やってもやらなくてもさして影響のない科目」。そういうイメージが一般に広がっている。だからこそ、第一時間目の授業でこのテーマを取り上げる必要があるのだ。

私は黒板に向かって「○○を読む」と大きな字で書く。

「これからゲームをしよう。この○○に文字以外のものを入れて例文を完成させてほしい。文字はだめだよ。新聞とか本とか漫画はだめ。みんな文字を使ってるからね。もしも5つ以上例文が作れたら、君たちの勝ちだ。さあ、何でもいいから、○○にあてはまる単語を言ってみてほしい」

以前はここで生徒がぐっと詰まったのだが、最近では最初の答はすぐに返ってくる。どんな答えだかおわかりだろうか。そう、「空気」である。いわゆるKYというやつだ。

「なるほど、空気っていうのは文字で書かれてるわけじゃない。その集団なり、組織なりのなかになんとなくただよっている雰囲気とか暗黙のルール、そういうものを『空気』というわけだ。その調子で他にも文字以外で『読む』ものを挙げてくれるかな。」

「表情」

「なるほど、相手の表情を観察して、心のなかで何を考えているかを想像することを『相手の表情を読む』っていうね。他には？」

「作戦」

「相手チームの選手の動きを観察して、彼らの作戦を読みとるわけだ。これもいいね。」

「心理」、「未来」、「流行」。次々に声があがる。ひとしきり生徒が用例を挙げ終わった後で、私はこう言う。

「5つ以上挙げてくれたから、このゲームは君たちの勝ちだ。でも、さっきの話に戻ると、『文字をたどって文章の意味を理解する』という『読む』の定義は修正しなければいけないことになるね。だって、僕たちは文字以外のものだって、いろいろと読んでいるわけだから。」

彼らは「そうか」という顔をする。

「じゃあ、今挙げたいいくつかの用例、たとえば、空気を読む、表情を読む、作戦を読む、心理を読む、未来を読む、流行を読む、これらの『読む』に共通してあてはまる『読む』の意味はなんだろう」

これはなかなか難しい問題である。

「推理する、かな？」

一人の生徒がそう答える。

「たしかに推理するという要素も入っているようだけど、『読む=推理する』ということでもなさそうだ。『空気を推理する』、『表情を推理する』って何となく変じゃない？」

生徒は考えこむ。

「空気はちょっとめんどくさいから置いといて、たとえば表情を読む。これは相手の表情のちょっとした変化から、その人間がこころのなかで何を考えているかを探ることだよ。作戦も相手チームの動きをよく観察して、彼らがどのような作戦に従っているかを探るわけだ。心理も基本的には表情と同じ。未来や流行だって、何も無いところに勝手に想像するんじゃないで、何らかの手がかりにもとづいて未来を予測するわけだ。最初の『空気』だって、まわりの様子を観察して、その集団の全体的な雰囲気を感じとることだ。これらに共通する『読む』の意味ってわからないかな」

「つまり、何かの手がかりにもとづいて意味を考えるってことかな」

「うん、けっこういい線いってるけど、もうひといき。手がかりって、だいたいどのへんにあるんだい」

「えーと、どっちかという目に見えるところ」

「つまり、表面ってわけだ」

「うん」

「じゃあ、意味はどこにあるの」

「それよりは奥」

「それを入れて定義し直してみよう。つまり、読むとは物事の表面をよく観察して、その奥に存在している物事の意味を考える作業だ、とか」

生徒はうなずく。

「この奥にある物事の意味を一言で何というんだろう。表面の奥にある、その物事の核心。それを他のことばでどう言い表せばいい？」

「本質！」

「そう、その通り。これでやっと完成した。『読むとは、物事の表面をよく観察して、その奥に存在している本質をつかむ作業である』、これでどうだろう。」

生徒もおおむね納得してくれたようだ。

「私が考える現代文の『読む』の定義もそれと同じなんだ。つまり、現代文の読むは、ふだん新聞や雑誌を寝ころんで眺めているような読み方とは少しちがう。ぼんやりと表

面だけをなでているような読み方では読みとれない、その文章の本質をつかみ出す作業、そういう読みの力を鍛え上げるのがこの科目の目標だと私は考えてるんだ」

日本人であれば、基本的に日本語を読むことはできる。だから、あえてその読み方を人に教わる必要はない。そういう考えがおそらくは生徒のなかにかかなりの程度まで浸透している。したがって「現代文はやってもやらなくても同じ」と言われるのである。現代文はこのように学習の動機付けを行うのがむずかしい科目である。だからこそ、「現代文とは何か」という定義を行うことによって、この科目が何をどう学ぶかを最初に明らかにしておかなければならない。この場合、「読む」という行為の奥深さを伝えることがもっとも有効な方法だと私は考えている。なんとなく表面を眺めるだけの「読み」ではなく、文章の表に表れている筆者のことばづかいを精細に観察し、そこに示された微細なシグナルを鋭敏に察知する。それを手がかりにしてその文章の奥にある核心をつかみとる。それが「読む」ということである。もしそうだとすれば、文章の精細な観察の仕方、筆者のシグナルを鋭敏にキャッチする方法、本文の主題を的確につかみとる手順、これらを教わる必要のないこと、学ぶ必要のないことと考える人間は少ないだろう。だから、現代文とは十分に学ぶに値する科目であり、日頃、無意識的に行われている「文章を読む」行為を、あらためて意識化し、その方法を確立するきわめて大きな意義を有する科目なのである。私はそういう願いをこめて、「現代文」を定義し、「読む」を定義する。そのことを通して、読むことの大切さを彼らに伝えたいと願うのである。

### 3. 文章の「奥」にあるもの

---

---

さて、初回の授業はまだ終わらない。ここからようやく文章の話になる。

「現代文の読みとは、けっして表面的な情報を受身で受信することにとどまらない。さっき言ったように『文章の表面を注意深く観察し、その奥にある本質をつかむ』読み方を君たちはこれから学ばなければならない。でも、ここで疑問に思うはずだ。はたして文章の奥には何があるのか。文章は平面的な紙の上に印刷されている。こんな平面的なものに奥行きなんてはたしてあるのだろうかと。」

ここで私は文章を解剖してみようという。文章をできるだけ細かい部分に分解してみる。すると、文章の最小の単位はいったいなんだろう。生物ならば、その基本的な単位は細胞である。では、文章の場合、その細胞にあたるものは何だろう。私はそう問いかける。

「文字」

生徒はそう答える。

「なるほど、文字か。いいだろう。文字が集まって何ができる？」

「単語」

「単語が集まって？」

「文節」

「おお、文法知ってるな。じゃあ、その次は」

「文」

「そう、文と文章の区別は知ってるね。文はひとつのセンテンスのこと。はじまってからマル（句点）で終わるまでの単位を文という。それが複数連なって文章になる。でもいっきに文章まで行ってしまうと、大事なものをとぼしてしまうことになる。文がいくつ集まってあるまとまりができる。それを何という？」

「段落」

「そう、じゃあ、その段落と段落のつながりのことを何ていうか知ってるかな」

生徒はちょっと考えこむ。

「段落と段落がどうつながっているのか。そのつながり方を何ていうんだろう」

「構成かな？」「文脈じゃない？」

「そう、どちらでもいい。つながりということでは、文脈だし、複数の段落の組み立て方と考えれば構成だ。ここでは文章の読み方を考えているわけだから、こう考えようか。まず文字を読む。それが組み合わさって単語になる。さらに単語が連なって一

文ができる。その意味を理解する。おそらく君たちはここまでで読みの作業が終了したと考えるんじゃないだろうか。たしかに英語の場合、アルファベットがわかり、単語が理解でき、一文の意味がわかれば、それはほとんど『読めた』ということになる。それが正確にできれば英語の先生は頭を撫でてほめてくれるだろう。でも、現代文ではそうはいかない。この科目は日本人が日本語を読む科目なんだ。そこまでは大部分の人間はできて当然なんだよ。問題はここから先。現代文で点差がつくのは実はこの先の部分なんだ。それがさきほどいった文章の『奥』にあたる。文字、単語、一文、それらはいわば文章の表面にすぎない。それらをてがかりにし、微細に観察して、その奥にあるものをつかみとる。それは具体的には『段落』を読む、次に『構成（文脈）』を読む作業を意味する。さらに、文章の一番奥、いわばその文章の核心に存在するものを何ていうか知ってるかな」

生徒は考えこむ。

「その文章を書いた人間が、文章を通してもっとも言いたかったこと。おそらくそれが文章の核心だ。それを何ていうかわかるかな」

「主旨」、「論旨」、「主題」、「テーマ」。

いろいろなことばが出る。

「みんなが言ったことばはだいたい同じものを意味してるけど、これからこの授業ではそれを『主題』ということにしよう。だから、表面的な文章の奥には、段落、文脈、主題。この三つの層があると考えてほしい。読むというのは、ただ単に文字を書かれた順にたどって、はい終わりというものじゃない。それだけなら、日本人が日本語を読んで、それほど大きな点差がつくはずはない。じゃあ、どこで差がつくか。一つの段落を読み終わって、「この段落には何が書いてあったか」という質問に一言で答えられる人間、答えられない人間、ここで差がつく。次に、「この段落とこの段落はどうつながっているのか」という質問に答えられる人と答えられない人、最後に「要するにこの文章で筆者が一番言いたいことはなんだろう」という質問に、即座に答えられる人とそうでない人。これら三つの関所をクリアできるかできないか、それが現代文の学力差となって表れるわけだ。」

生徒はだいたい理解してくれたようだが、どこか「片づかない」顔をしている。どうやってその能力を身につけるのか、その具体的な方法がうまくイメージできないようだ。

「そのためにはまず、ひとつの段落を読み終わったら、その段落に何が書かれていたか。一本か二本の線で指摘する。できればその線にもとづいて自分のことばで段落の内容を一言で言えるようにすればもっといい。これが『段落を読む』作業。それが終わったら、各段落の重要部が互いにどうつながっているかを『読む』。これはさきほどの線を引いた箇所をたどって行って、そのつながりを考えればいい。これが『構成（あるいは



は文脈)を読む』作業。最後に以上の二つの作業を踏まえて、本文の主題を自分のことばで的確に要約する。ふだんからこの三つの作業を心がけていれば、文章の本質を見抜く能力は確実に高まってくる。そして、それさえ確実にできれば、一部の知識問題を除いて、現代文の入試問題はほとんど解ける仕組みになっているんだ。わかったかな」

## 4. そして、「読み」のイメージ・トレーニングへ

---

---

ようやく生徒の顔が落ち着いてくる。まだ具体的な作業には入っていないものの、何をやるべきかということが少しはイメージできたようである。後は、具体的な文章や問題を用いて、「読み」のトレーニングをしていけばいい。要はその前に「何を学ぶべきか」ということについての的確なイメージ・トレーニングを行うことである。現代文ではその作業が欠かせないと私は考えるのである。

私はこのイメージ・トレーニングを次のように締めくくる。

「さっき段落が集まって文脈が形成される。その二つがわかると、文章の主題がわかるという話をしたよね。」

生徒はうなずく。

「それを視覚的にイメージしてみよう。たとえば、今、目の前にいくつかの山があるとする。ひとつひとつの山が『段落』だ。複数の山がいくつか集まっている時、それらを何ていうか知ってるかな。」

「山脈？」

「そう、山脈だ。だから、山が段落だとすると、山脈は文脈にあたる。あの山とこの山はこんな感じでつながってる。そういうつながりを押さえるのが『文脈を読む』作業だ。つまり、文章を読むということは、山登りみたいなものなんだよ。文字をたどることはひとつひとつの山を一步一步登っていくことを意味する。そうすることでその山の形をつかむ。次に隣の山に登る。そこでさっき登った山と、隣の山との関係（＝文脈）をつかむ。そのようにして全ての山を踏破したら、自ずからもっとも標高の高い山がどれかがわかるはずだ。それを主題というわけだ。わかるかな」

「論理的な文章を読むという作業は、そういう山登りをする事なんだ。これまでも君たちはハイキングやウォーキングをした経験はあると思う。でもそれだけで本格的な山登りができるとは限らない。標高の低い、ゆるやかな山ばかりではなく、切り立った崖や標高の高い山に登るためには、それなりのトレーニングと修練が必要になる。これからそれをやっていくことになるわけだ」

そういつて私は初回の授業を終える。彼らの頭の中に、そそり立つ高山の頂と、それを振り仰ぐ登山者の姿と、初々しい決意と意欲が鮮明にイメージされていることを心のなかで願いながら。